Choho

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY
長崎大学広報誌
［チョーホー］

特別号

contents

学部長就任予定者メッセージ	01
4年間の学び	03
グローバル社会コース	05
社会動態コース	07
共生文化コース	09
オランダ特別コース	11
英語教育と留学	13
キャリア教育と就職支援	15

長崎大学 新学部
多文化社会学部

Nagasaki University
School of
Global
Humanities
and
Social Sciences

長崎大学待望の人文社会系の新学部、多文化社会学部がいよいよ船出します。この学部のコンセプトは「ローカルからグローバルを目指す」。その意味とは？ どんな学びが待ち受けているのか？ 教員の顔ぶれは？ 何を得て世界の海に漕ぎ出せるのか？ 多文化社会学部に関する気になる情報を、一冊にまとめました。

多文化社会学部
長崎大学
Nagasaki University School of Global Humanities and Social Sciences

人文社会系グローバル人材は長崎大学から巣立つ

多文化社会学部長就任予定者
佐久間正
長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授。博士（文学）。一九四九年生まれ。専門分野は日本思想史。著書に『徳川日本の思想形成と儒教』（ぺりかん社）などがある。

今世界では、人々やモノ、情報が国境を越えてグローバルに行き交っています。そのなかで仕事をしていくには、どのような職種であれ、コミュニケーションツールとしての英語が必要です。それは相手の言っていることがわかるだけではなく、会話をする、交渉をする、相手の気持ちを受け止めて議論する、そして意見を一致させ、共に行動していくといった高いレベルの語学力です。語学力の養成に力を入れるこの学部が、従来の外国語学部とどう違うのかと疑問をもつ方もいるかもしれませんが、相違点はその先にあります。英語はひとつのツールであり、その英語で何を話し、伝えるのかということに焦点をあて、カリキュラムを構成していることが、この学部の大きな特長です。

グローバルな職場では、どの大学を卒業したかではなく、「この組織でどのような役割を果たすことができるのか」、「このフィールドにどのような貢献をなしうるのか」ということが問われます。その意味で大学できちんとした知識とスキルを身に付けることが何よりも重要です。しかし、その知識やスキルが日本語のみに閉じられたものであったとしたら、グローバル化する社会の中で役立てようもありません。それゆえに汎用的ツールとしての英語が重要となるのです。

世界にはさまざまな文化があり、さまざまな人々が生きています。アメリカは確かに極めて大きな影響力を有する国ですが、決してアメリカ的な価値観が全てではありません。アジア、アフリカ、ヨーロッパという多様性を抱えた国々がどのような文化や思想、政治的バランスのうえに成り立っているのかを学ぶことは、グローバル社会に生きる人間にとって不可欠です。この学部にはそれらを教える意欲的な教員が揃いました。

私はかつてエジプトのカイロ大学文学部で一年間教鞭をとったことがあります。アラブ―イスラーム世界に身を置きながら、日本にいる場合とは異なり、イスラームをはじめとする宗教の意味と社会的役割について深く考えざるをえませんでした。例えばこういったイスラーム社会の文化や考え方なども、学生のうちにきちんと学んでおけば、どこで働くにせよ必ず役に立つことでしょう。

この学部に入ると、かなりの覚悟でもって英語の勉強をしなければいけません。学生自身がしっかりモチベーションをもって勉強できるよう、私たち教員も学生の英語力を伸ばすためのプログラムを用意し、手厚い指導体制も整えました。

長崎は四〇〇年以上世界とつながってきた歴史を持つ国際交流都市です。この地を拠点にして世界を視野に入れて学ぶことは、きっとみなさんの将来を切り開く大きな力、知の財産となることでしょう。

数字で見る
多文化社会学部

4コース
この学部の学びのキーワードは「長崎から世界へ」。それを実現するために、グローバル世界の仕組みを学ぶグローバル社会コース、人・モノの動きから世の中をとらえる社会動態コース、異なる文化や言語をもつ他者との共生を考える共生文化コース、そして、オランダを切り口に現代の欧州を学ぶオランダ特別コースの4つのコースを準備しました。それぞれ個性的な先生方がスタンバイしています。自分の学びにぴったり来るコースに進み、目標に向かってチャレンジしてください。

2段構え
語学力を鍛え、その語学力で社会で役に立つ力や知識を身に付ける――この学部の学びの構造は2段構えになっています。これまでの人文系学部や外国語学部にはなかった、グローバル社会で即戦力になる人材を育成するカリキュラムが特徴です。

1000時間
入学してすぐに始まるTransition Programでは、高校での学習から大学での探求へと学びの移行をはかりながら、英語力を集中的に鍛えます。それが「知の1000時間マラソン」。正課科目のほかに、英語合宿（72時間）、夏期集中講座（63時間）、英語カフェへの参加（189時間）、Program成果発表会（5時間）を含んでおり、正課科目との合計で1004時間の集中学習を実施します。

10:3
Transition Programは指導体制に特徴があります。まず100人の学生を10人ずつ10のグループに分けるのですが、その10人をサポートするのは、教養ゼミナールの担当教員、英語科目もしくは英語で開講される科目の教員、そして学生と教員の間をつなぐコーチングフェローの3人。学生10人に教職員3人がサポートする、国立大学の中でも破格の手厚く丁寧な指導体制です。

30%
多文化社会学部の教員は、約30名。その約30%が外国籍もしくは外国出身の教員で、それぞれ多彩な専門をもち、多言語での講義も可能です。海外での実務経験や調査経験も豊富な“現場に強い”教員団です。

専門性と語学力を身に付けるカリキュラム

多文化社会学部 4年間の学び

Transition Program（トランジジョン・プログラム）

専門科目を英語で学ぶための徹底したトレーニングと「高校での勉強」から「大学における探究」への移行を実現するために一年次前期に開講されるプログラムです。「英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ」「総合英語Ⅰ、Ⅱ」「英語発音法」「Reading and Writing Ⅰ」「Reading and Discussion Ⅰ」の7つの英語科目と、大学での学びの型を体得する「教養ゼミナール」、卒業後のキャリアイメージを具体的に描くための「グローバルキャリアへの扉」、多文化社会の現場での学びの土台を作る「フィールドワーク入門」という3つの大学入門科目のみを集中的に受講します。

なお、入学時の英語力が基準を上回っている学生については、国内外でのインターンシップなど特別プログラムを用意します。

留学について

短期留学

英語をはじめとする外国語能力を向上させ、同時に異文化への関心を高めるために、原則として全ての学生が、1年次後期から2年次前期までに、数週間、提携先の海外大学での語学研修プログラムに参加します。

中期・長期留学

「グローバル社会コース」と「オランダ特別コース」の学生は、2年次後期から4年次前期までの期間に、中期・長期留学（半年・1年間）を行います。「社会動態コース」と「共生文化コース」の学生も参加可能です。中期・長期留学の目的は、学部で身に付けた専門知識を海外での異文化体験を通して実践的に深化させ、短期留学のみでは得難い生活者としての体験を通して、世界と自己について認識を深めることにあります。大学間交流協定に基づく交換留学制度を利用した留学であり、留学先において修得した単位を本学部の単位として読み替えるため、長期留学しても4年で卒業することができます。

大学生のうちに海外留学をし、異文化を直接体験することは、語学力の向上にとどまらず、国境を越えた幅広い人脈を得、異文化に対する知識や理解を深め、日本や自分自身を顧みる、またとない機会になるでしょう。

身につける4つの力

必要な力	身につけるべき能力	提供されるカリキュラム
ことばの力	高度の外国語能力とコミュニケーション力	●英語モジュール ●中国語モジュール
調べる力	フィールドにおけるリサーチスキル	●フィールドワークモジュール
知識・考える力	多文化状況の意義の理解	●学部モジュール ●共通基礎モジュール ●専門モジュール
行動力	リーダーシップ・パートナーシップと問題解決力	●留学 ●フィールドワーク ●インターンシップ

モジュール方式とは

長崎大学では、平成24年度から教養教育において、モジュール方式を導入しました。モジュール方式とは、一定のテーマのもとに体系化された授業科目群（=モジュール）の中から、興味のあるモジュール一つを選び受講するという履修スタイルのことです。

従来の、多くの科目群から学生が自らの興味にしたがって一科目ずつ選択履修する方式では、幅広いテーマについて学ぶことができる反面、まとまった知識を得にくいという問題点がありました。モジュール方式の導入により、選択したテーマに関する多面的な見方、考え方を身に付けることができるだけでなく、専門とは異なる分野のモジュールを選んだ場合には、複数の専門分野の知識や技能を身に付けることもできるようになりました。

多文化社会学部では、このモジュール方式を専門教育においても本格的に導入し、基礎科目を経て専門に至る授業科目をモジュールの連接と組み合わせによって編成することにより、各科目が有機的に結びつき、専門性と学際性を両立しうる斬新な専門教育を導入しています。

共通基礎モジュールや専門モジュール以外にも、リサーチ・スキルを身に付けるためのフィールドワークモジュールや、教養教育で身に付けた英語や中国語の力をより実践的なものにする語学モジュール（英語・中国語）を用意しています。

外国語科目（教養教育）

教養教育の外国語科目は、英語科目8単位と初習外国語科目4単位から構成されています。

英語科目としては、「英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ、Ⅲ」（3単位）「総合英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（3単位）「Advanced EnglishⅠ、Ⅱ」（2単位）が開講されており、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの4技能をバランスよく向上させます。なお、英語コミュニケーションⅠ、Ⅱと総合英語Ⅰ、Ⅱは、Transition Programの構成科目です。

初習外国語は、ドイツ語、フランス語、中国語及び韓国語から一言語を選択します。各言語の基本文法を理解し、基礎的な会話文でコミュニケーションができる能力を養います。なお、オランダ特別コースの学生にはオランダ語と同じゲルマン語系で語彙・文法ともによく似たドイツ語の履修を、将来中国語モジュールを選択する予定の学生にはその基礎となる中国語の履修を強く勧めています。

全学モジュール

全学モジュールには、社会から求められている諸能力（社会人基礎力、ジェネリック・スキル）を育成するため、現代社会の課題となっているテーマの下にまとめられた23のモジュールが準備されており、そこから一つのテーマを選択します。テーマについて学ぶための基礎的な知識と技能を身に付けるための全学モジュールⅠ科目（3科目を1年次後期に全て履修）と、さらにテーマに関する学びを深化させる全学モジュールⅡ科目（2年次前期と後期に、6科目から3科目を選択履修）から構成されています。

「先進医学と現代社会」「安全で安心できる社会」「環境問題を考える」など興味深いテーマが並びますが、将来グローバル社会コースに進みたい学生には、経済学部が提供する「現代経済と企業活動」の選択を勧めています。

コースの決定方法

「オランダ特別コース」の学生は入学時から所属コースが決定していますが、他の学生は共通基礎モジュールと専門モジュールの選択に基づいて、「グローバル社会コース」、「社会動態コース」、「共生文化コース」のいずれかに進むことになります。2年次に履修する共通基礎モジュール科目では、3つのモジュールから1つを主モジュール（6単位12科目）、1つを副モジュール（3科目6単位）として選択し、3年次に履修する専門モジュール科目では、3つのモジュールから1つを主モジュール（10科目20単位）、1つを副モジュール（5科目10単位）として選択します。これらの共通基礎モジュールと専門モジュール科目の主モジュールの組み合わせにより、3年次に全員のコースが決定します。

共通基礎モジュールで「グローバル社会のしくみ」を、専門モジュールで「グローバル化する世界」を主モジュールとして選択した学生は「グローバル社会コース」を、共通基礎モジュールで「社会を映し出す文化、文化が作り出す社会」を、専門モジュールで「変容する社会」を主モジュールとして選択した学生は「社会動態コース」を、共通基礎モジュールで「社会が映し出す文化、文化が作り出す社会」もしくは「多言語を学ぶ、多言語で学ぶ」を、専門モジュールで「多文化の共生」を主モジュールとして選択した学生は「共生文化コース」を主コースとして履修することになります。さらに、各コースの専門モジュール科目を担当する教員が指導する専門演習や卒業研究において専門性を深め、卒業研究を執筆します。

多文化社会学部
長崎大学
Nagasaki University School of Global Humanities and Social Sciences

グローバル社会コース

国際法規や行政資料を読み解き データを比べて何かをつかむ 〈一人前の英語〉を駆使してできること

こからは各コースの紹介をしていきます。ページ内にある「学ぶ科目」を比べると、それぞれのコースの違いや特徴が理解できるでしょう。まずグローバル社会コースについて、コンペル・ラドミール先生にお話を伺います。

「グローバルとは、国境の枠組みを超えて、地球規模で人、モノ、金、情報が移動する状態のことですね。英語ではグローバルワールドといいますが、日本語としては「グローバル社会」がなじみやすいので、このコース名になりました。このコースでは、法学、政治学、経営学を中心とした国際社会の仕組みを学びます。日本の大学では、法学や政治学などの社会科学と歴史学や言語学などの人文学は、異なる学部で学ぶよう制度設計されていることがほとんどです。しかしこの学部のカリキュラムは複数の専門領域を横断した編成となっています。国や地域の社会基盤を見るのに、歴史や宗教、言語といった側面からも学ぶことができます。これは学生にはラッキーだと思います。私は専門が比較政治学で、沖縄が研究対象です。沖縄戦や米軍基地などの問題は、沖縄の思想史や言語、近世の日本との関係を通して読み解くことが不可欠です」。

法学や政治学を学ぶ際に、その背後にあるものを知ることは大切ですか。

「もちろん、そうです。例えば法学において、言葉は大きな存在です。法律や判決文など、言葉の解釈の違いが新たな問題を引き起こす。憲法九条などがいい例です。また、外国人の裁判記録では発言の誤訳や誤解が重大な結果をもたらす場合があります。海外で『自分はこう考えているからみんなも同じ、自分の育った環境は普遍的だ』と思い込むのは危険です。仕事上の英文メールひとつにしても、それが相手にどう受け止められるか、相手の国の歴史や宗教を理解したうえで誤解なく意思疎通するスキルは、社会に出てから学ぼうとしても遅い、学生のうちに身に付けておくべきものです」。

このコースの講義は一〇〇％英語。かなり鍛えられそうですね。

「はい。英語で書かれた行政資料、報告書、法律や判例など様々な資料を読み解く眼を養っていきます。それらを他の国のデータと比較することも大切です。語学の専門家というより、一人前の英語を駆使して、世界を舞台に柔軟に活動するイメージです。JICAを目指すから国際開発論や国際協力論を学ぼう、国連に関わりたいから国際法を学ぼうと、自分の将来に向けて学びを構築していけばいい。このコースでは、長崎大学核兵器廃絶研究センターの広瀬訓先生や海外での新聞記者の経験を持つ森川裕二先生など、実務経験豊かな先生方も講義を担当します」。

国際社会を学び、自分がその一員として活躍する日を夢見て日々を重ねるには、理想の環境ですね。

Interview

コンペル・ラドミール Compel Radomir

長崎大学多文化社会学部設置準備室 准教授　1976年チェコスロヴァキア生まれ。博士（国際経済法学）。専門は比較政治学。著作には『芦田均日記1905～1945』（第5巻、柏書房、共著）や「日本国憲法の制定と沖縄の関連性」（『横浜国際経済法学』21-3）などがある。

学ぶ科目

- 国際機構論
- 軍縮と平和
- 国際法
- 国際政治学
- 比較政治
- 国際経営
- 国際開発論
- 国際人権論
- グローバル人口学
- 国際協力論
- アジア経済論
- 多文化マーケティング論

Column

高度な英語運用能力の養成

このコースの特徴は、徹底的かつ系統的な英語教育を行うことにあります。一年次前期のTransition Programに始まり、英語モジュール、多くが英語で開講される共通基礎モジュール「グローバル社会のしくみ」を経て、十二科目全てが英語によって開講される専門モジュール「グローバル化する世界」までを一貫して履修します。また、英語による講義と併せ、短期と中期・長期の二度の留学、及びその成果の英語によるまとめと公開を通して、本コースの学生は、多文化社会学部の中でも、特に高度な英語運用能力と国際感覚を身に付けることができます。

英語での講義に付いていけるか不安に思う人も中にはいるかもしれませんが、ご安心ください。新学部では、きめ細かい指導体制で個々の学生のサポートを行います。英語の自学自習システム（オンラインCALL）も二十四時間アクセス可能ですし、外国人の先生や英語に堪能なコーチングフェローと同じテーブルを囲み、英語でのおしゃべりを楽しんだり、留学や学習へのアドバイスを受けたりすることのできる英語カフェなどを準備しており、講義時間以外でも、英語環境に身を置くことができます。

Message

石司真由美
いしづかまゆみ
国際法担当予定者

長崎で国際法を学ぶ意義

いわゆる原始社会の時代から現代に至るまで、世界では常に紛争が存在し、多くの人々が血を流してきました。私が専門としている国際法は、国際社会が、多様な国家、民族、宗教、文化等の違いを超えて共存し、究極的には平和な世界を築くことを目標として築き上げられてきた、いわば国際社会の「ルール」です。科学技術の発展や地球的規模の課題の増加に伴い、そのルールの範囲は、戦争の防止だけではなく、環境や人権の分野に拡大し、国連をはじめとする多くの国際組織が設立されてきました。国際法の講義では、主にそのルールの内容や歴史について学んでいきます。

しかし時として、そのルールは効果が薄かったり、破られ、曲解され、無視されてしまったり…と、現実的には意味のないものに思えることもあります。はたまた、たとえルールが定められていたとしても、A国にとっての「正義」がB国にとっては「侵略」である等、それぞれの政治的な状況のみならず、根本的に異なる宗教観、道徳観の壁が立ちふさがり、ルールの意義が見失われそうになることもあります。とはいえ、対話を諦め、共にルールを作っていこうとする姿勢と労苦を投げ出してしまっては、国際社会の平和は決して築かれません。国際法を学ぶ過程では、時として理想と現実のジレンマに陥ることがあることは否定できませんが、現代に生きる私たちが、国際社会の問題を認識し、平和な世界を希求した先人たちの努力と格闘から学んで、次世代にどういう世界を託すべきなのかを考えることは、極めて有意義なことであると思います。

そしてここ長崎で――日本に国際法が入ってきた玄関口であり、いわゆる「鎖国」の時代にも国際法が用いられていた地であり、宗教迫害と原爆を経験した地でもある、ここ長崎で国際法を学ぶということには、他の地では得られない意義と醍醐味があると確信しています。長崎大学で、みなさんと共に国際法を学ぶことを心から楽しみにしています。

多文化社会学部
長崎大学
Nagasaki University School of Global Humanities and Social Sciences

社会動態コース

問題発見のスキルを体系的に学び「調べる力」を現場で磨く フィールドには可能性がいっぱい

Interview

長い歴史において、ヒトやモノや情報は常に移動を繰り返してきました。そして、世界のどこかの小さな変化が、別の場所で大きな変化をもたらしたりします。そうした社会の変化を「社会動態」と言います。このコースには社会のフィールド経験が豊かな先生方が多く在籍しています。一九九〇年代から北東アフリカにあるエチオピアの辺境の村に住み込んで、文化人類学の現地調査を行ってきた増田研准教授にお聞きしました。

「このコースではフィールドワークがテーマ。フィールドとは『現場』のことです。学問をする場所には書斎、ラボや実験室、そして現場の三つがあります。そこに行かなければ調べられない、現場での調査は多くの研究分野でとても重要です。子どもの頃、夏休みの宿題でアサガオやヘチマの栽培観察があったでしょう？　しかしフィールドワークでは、植物ではなく、生身の人間と対話し、心を通わせる必要があります。地域社会全体に目配りし、柔軟に対応する。現場でタフに動ける人材の育成を目指すため、教員は全員、フィールドワーカーです。例えば、結婚して日本に移住した女性たちを調査している賽漢卓娜先生や、日本や中国で移民と越境文化の調査をしている南誠先生がいます」。

このコースで学んだことは卒業してからどのように生きてくるのでしょうか？

「もちろん大学院に進学して研究者になるという道もありますが、それだけではありません。モジュールの内容でおわかりのように、何かを調べるスキルや分析する力、専門外の人を説得できる論の立て方は、論文作成や研究だけでなく、通常の仕事にも大いに役立ちます。例えば現場で何が問題なのかを探るとき、グループディスカッションで自由におしゃべりしてもらうやり方があります。その会話のなかからどんな問題が潜んでいるのかを浮き上がらせていく。私は『ざっと網をかける』という言い方をしますが、そこで獲れる魚（問題）の種類を分析し、そこから絞り込んでいくわけです。こういったスキルや調査の方法論の教育は、海外の大学ではきちんと確立されていますが、日本の大学の文系ではあまり体系的に教えられてきませんでした」。

なるほど、問題を発見し解決するための体系的なスキルですね。

「しかも、それらを学んだ学生をなるべく多く海外に送り出して、現場で実習させます。それはライセンス的な学びではなく、仕事に就いたその先で、難しい場面でもくじけずにタフにこなすためのコミュニケーション力と実践力を養成するわけです」。

グローバル社会で仕事をしていくために、フィールドワークの学びや経験は汎用性があるんですね。

増田　研
Masuda Ken

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科／大学院国際健康開発研究科 准教授　1968年神奈川県生まれ。博士（社会人類学）。専門はアフリカ民族誌研究。「武装する周辺―エチオピア南部における銃・国家・民族間関係」（『民族學研究』65-4）などにより、第8回日本ナイル・エチオピア学会高島賞受賞。

学ぶ科目

- 異文化理解教育
- トランスナショナリティ論
- 異文化と家族
- グローバル社会学
- 現代アフリカ社会論
- 現代アジア社会論
- アジア海域交流史
- グローバル文化交流史
- 社会史
- 異文化交流論
- 文化資源論
- 地域生態論

Column

フィールドワークモジュール

このモジュールは、「フィールドワーク入門」「フィールドワーク基礎実習」「アーカイヴ実習」「映像・デジタルアーカイヴ実習」「サーベイ基礎実習」「インタビュー調査基礎実習」「海外フィールドワーク実習」の七科目から構成されており、最初の入門と基礎実習の二科目は全コースの学生が必修、四つの実習科目については、そのうち二科目を選択します。また、更に高度な実習を希望する学生は海外実習を受講することもできます。

フィールドワークモジュールでは、問題を発見し解決するプロセスに必要なリサーチ・スキルを学びます。例えば、図書館の資料やデジタル素材の情報収集。ともすれば、ネット検索にたよりがちになるところを、体系的な調査手法を知ることで、論文作成や仕事の現場で役立ちます（アーカイヴ実習と映像・デジタルアーカイヴ実習）。またアンケート調査の基礎や統計の分析（サーベイ基礎実習）、状況に応じたインタビューの手法（インタビュー調査基礎実習）など、「調べる力」を多角的に学び、スキルを身に付けます。また、海外フィールドワークで調査の実践を経験することにより、現場での応用力を高めることもできます。

Message

賽漢卓娜
サイハンジュナ
異文化と家族担当予定者

結婚移民を通して社会の動きを探る

私のもともとの学術的な関心は、ある地域や社会における少数民族（エスニック・マイノリティ）の置かれた状況や主観的な帰属意識（エスニシティ）がどのように変容するのかという点にありました。これらを学ぶうちに、国際結婚をし、海外に移住した女性結婚移民のダイナミックなプロセスを、「移動」と「家族」というキーワードで研究するようになりました。

女性結婚移民は、一見、一女性の個人的な経験に過ぎない微々たる出来事のようですが、村、地域、国、東アジアを超えたグローバルな人の移動が一つの潮流になると、そこから共通した社会問題が見えてきます。女性の結婚移動を通して、母国と相手国両方の国内地域格差、職業格差、性差別、民族差別などが顕わになります。女性はなぜ生まれ育った故郷を離れるのか、異国でどのような家族を築くのか、どこが終の棲家になるのかといった点は、移民研究、ジェンダー論、教育社会学、家族社会学の知識を総合的に駆使することで初めて明らかにできる、興味深い課題です。

グローバリゼーションの進行する現代社会において、人々はこれまでにない規模で世界を移動し、容易に国境を越えるようになりました。日本も例外ではなく、人的移動が増加し、それに伴っていわゆる国際結婚の事例も多くなりつつあります。多文化共生や異文化理解が、私たちにとってもっとも親密な場である家族においても重要となっているのです。私が担当する「異文化と家族」では、現代グローバル社会における家族の異文化状況に関する基礎知識と、それに関わる諸問題を学びます。主に私が長期の現地調査に従事した日本、中国、韓国の事例を取り上げ、家族文化の多様性について考えます。家族を「常識」から問い直し、男性と女性の関係の在り方、グローバルに広がる不平等を検討していきます。

皆さん、大学でこそ、空気なんか読まずに、勇気を持って、この世界の豊かな多様性の真実を学んでいきましょう。

多文化社会学部
長崎大学
Nagasaki University School of Global Humanities and Social Sciences

共生文化コース

文化や言語、思想の違いを知り共感し、共に生きていくそのための基礎を学ぶ

Interview

共生文化コースは、多文化社会学部設置の中心メンバーの一人、葉柳和則先生にご紹介いただきましょう。

「このコースでいう『共生』とは、自分とは異なった言語や文化を背景に持つ人々を理解し、互いに共感し、協力して生きるということです。世界がグローバル化していくと、同じ空間でどうやってお互いを傷つけずに生活するか、それがこれまで以上に切実な課題となります。移民問題と結びついたイスラムと西欧の対立などがその例です。東アジアでも日本と韓国、中国との国境をめぐる対立がグローバル化とともに激化していますね。共生という切り口から、文化や言語、思想、宗教に焦点をあてて勉強していくことで、解決の糸口を探っていきます。従来の学問領域でいえば、文学部に一番近いかもしれません」。

科目名を見ると思想史、宗教学もありますね。

「これまでの思想史や宗教学は、ある人物あるいは学派が残した文献の解釈が中心でした。しかしこの学部では少し違います。例えばアジアからの労働者といっしょに仕事をする、あるいは隣人として生活する。そこで『この人はどうしてこういう考え方や行動をするのだろう』と疑問を抱いた場合、それを性格や国民性として決めつけるのではなく、その国の歴史や思想を知り、それが相手の言動にどのように現れているのかを理解していく。宗教学にしても経典の研究よりも、今のイスラムの人々が信仰を守り続けるのはどういうことだろうか、ということに重点を置いて学習します。その意味で文系的な『臨床』の学だと言えるでしょう」。

このコースでは、外国のことだけでなく、日本のこともしっかり学ぶのですね。

「留学などで外国に行くと、日本についてよく聞かれます。ところが多くの日本人は自国の文化を説明することを苦手としています。しかし、能や禅について聞かれて『退屈なので寝てしまう』なんて返せば、相手からのリスペクトを失ってしまいます。日本に生まれ育った人間だからこそ、日本やアジアを深く知り、英語で説明できて初めて文化交流ができる。日本思想史をはじめとする日本学関連の科目が必要なのはそのためです」。

ほかにどんな学習ができるのでしょう。

「私の専門は文化表象論でメインのフィールドはスイスです。フランス語圏、ドイツ語圏、イタリア語圏があり、文化はバラバラなのに、私たちはスイス人だという認識が共有されており、国を愛する気持ちは、フランスのような単一言語国家よりも強いほどです。その理由を文化の観点から探っていきます。またモンゴルのキリスト教について研究している滝澤克彦先生、ルーマニア人でメディア文化論の視点から宝塚歌劇を研究をしているグラジディアン・マリア先生など、専門だけで世界一周できそうな個性的な教員団ですよ」。

文化や思想の違いを楽しんで共生していける、タフな人材が育ちそうですね。

葉柳和則
Hayanagi Kazunori

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科 教授
1963年徳島県生まれ。博士（文学）。専門は文化社会学、文化表象論。著書『経験はいかにして表現へともたらされるのか―M・フリッシュの「順列の美学」』（鳥影社）により、第7回日本独文学会賞（日本語研究書部門）を受賞。

学ぶ科目

- 日本思想史
- 中国思想史
- 宗教文化論
- 文化表象論
- 記憶文化論
- 地域文化論
- メディア文化論
- 現代言語理論
- 異文化間コミュニケーション
- 対照言語学
- 日本語学
- コーパス言語学

Column

取得可能な免許と資格

共生文化コースに所属し、「教職論」「英語科教育法Ⅰ、Ⅱ」「教育の方法と技術」「教育実習」などの教職関連科目を履修することにより、高等学校教諭普通免許状の「英語」が取得可能となる予定です（現在、申請中）。自らがグローバルに活躍することも素晴らしい進路ですが、英語教員は英語能力を直接に生かせる仕事であり、グローバル化の進む時代へと羽ばたく人材を育てる魅力的な仕事でもあります。

また、自由科目の「日本語教育学概論」「日本語指導法」「日本語教育実習」や、共通基礎モジュール「多言語を学ぶ、多言語で学ぶ」や専門モジュール「多文化の共生」等で開講される日本語教員基礎資格科目を修得することにより、日本語教員基礎資格を得ることができます。

国際交流基金の二〇一二年の調査では、世界の二〇一の国と地域で三九八万人もの人々が日本語を学習していますが、日本語教員の数はまだまだ不足しており、日本語を母語とする教員の割合も地域によっては、かなり低い現状にあります。特に英語の堪能な日本語教員に対する需要は高く、本学部で日本語教員基礎資格を取った卒業生はその条件を満たしていると言えます。

Message

グラジディアン・マリア
メディア文化論担当予定者

ポップカルチャーを事例にメディア時代の文化を探る

私たちは、メディアに囲まれて暮らしています。テレビ、ラジオ、インターネット、新聞、雑誌だけでなく、映画、演劇、書籍などがもたらす情報は、日常生活の中にあふれ、私たちは、世界中の出来事について居ながらにして知ることができます。しかし、あふれる情報から必要なものと不必要なものを選り分けることは容易ではありません。しかも、それらの大部分はネガティブな問題に関するものです。これらのことに気づくことが何よりも大切です。メディアによって刻々と提供される情報の海をうまく航海するために、我々には、情報の質を見極め、取捨選択する勇気と洞察力が必要なのです。

専門モジュールの「メディア文化論」では、日本と世界における多様で混沌としたメディア状況について講義します。主たる事例として宝塚歌劇を取り上げ、メディア研究の基本理論を、固有のメディア＝媒介構造を有するこの劇場に適用することを軸にして講義は展開します。つまり、近代日本の文化現象としての宝塚歌劇と現代のメディア理論とが切り結ぶときに見えてくるものを検討することが、この講義の基本的スタイルです。

メディア研究の理論を学ぶことによって、メディアが伝えるデータやメッセージに対してはもちろん、教員が教える情報に対しても批判的な姿勢を持つことが可能になります。その際に鍵となるのは、情報と知識の差異を見分けることです。これがあって初めて、情報が知識へと変化する過程を理解することと、不要な情報と将来知識となる必要な情報とを見分ける能力を身に付けることができます。本講義の最終的な目標はここにあります。

私が強調したいのは、精選された知識と個人的経験が、卒業後の人生に役立つ知恵につながっていくということです。この講義の中で得たメディア情報とうまく付き合うための理論と実践的なスキルは、みなさんが自立し充実した人生を送るよう日々努力する際にきっと役立つはずです。

多文化社会学部
長崎大学
Nagasaki University School of Global Humanities and Social Sciences

オランダ特別コース

〈オランダ〉という素材にこだわった世界でも珍しい特別コース ライデン大学への長期留学も魅力

Interview

注 目のオランダ特別コースの詳細は、この春に長崎大学に着任した木村直樹先生にお伺いします。

「まず、どうしてコース名に〝特別〟が付いているかということからお話ししましょう。通常、大学には学問領域というものがあります。どのような学問の手法に基づいた学びなのか、これは言ってみれば料理方法のようなもの。ある一定の素材を揚げるのか？　蒸すのか？　炒めるのか？　その方法を学ぶのです。ところがこのコースの場合、〝オランダ〟という国、文化圏に特化しているのが最大の特徴で、学問領域がない。つまり料理方法ではなく料理の素材にこだわったコースなのです」。

このようなスタイルのコースは他大学にもあるのでしょうか。

「アメリカなど日本でなじみのある地域を中心に学ぶコースをもつ大学はあるのですが、ヨーロッパを対象とするものは少ないですね。ましてオランダに限って言えば、日本の大学で唯一となります。そして定員は十名。これは、オランダのライデン大学への一年間の留学を想定した定員です。留学先では最初は『ダッチスタディーズ』という、世界中から集まった留学生と一緒にオランダ語やオランダのことを学ぶクラスに入りますが、次第にヨーロッパのことを英語で学ぶ講義が増えていきます」。

なぜオランダから始めるのでしょう。

「オランダを学ぶことの意義は三つあります。私は日本史、それも江戸時代の外交史が専門なのですが、江戸時代から近代にかけて、日本はオランダを経由して西洋の文化や知識を吸収してきました。その歴史を踏まえてオランダを知ることで現代の日本の立ち位置を見る目が養われます。二つ目は、オランダという国はヨーロッパのなかでも比較的小さく把握しやすいので、オランダを出発点にして、ヨーロッパのエキスパートを目指すことができる点です。三つ目は、現代のオランダは、実験国家としてさまざまな課題に大胆な政策を打ち出していることです。移民政策、安楽死、ワークシェアリングなど、まさに課題先進国家。その動きを知ることが、日本社会が近未来で直面する問題に対峙したときに役に立つ。いずれも、日本にいてはなかなか身に付かない、外からの視点を鍛えることにつながります」。

なるほど。日本やヨーロッパを理解する手がかりとしてのオランダなのですね。では、留学前に、日本でどのような講義を受けるのでしょうか。

「まずは、オランダ語。大学でオランダ語を学ぶカリキュラムがあるのは、世界でも珍しいですよ。講義科目には、ライデン大学の先生が生のオランダを語るオランダ現代社会論などがあります。またオランダ特別コース以外にも、オランダの移民政策の講義や、オランダと国際法の関係についての講義などがあり、コース横断的に学ぶことができます」。

オランダを入口に、そこから世界を学ぶんですね。

木村直樹
Kimura Naoki

長崎大学多文化社会学部設置準備室 准教授　1971年東京都生まれ。博士（文学）。専門は日本近世政治外交史。主な著書に『幕藩制国家と東アジア世界』（吉川弘文館）、『〈通訳〉たちの幕末維新』（吉川弘文館）などがある。

学ぶ科目

- オランダ語Ⅰ
- オランダ語Ⅱ
- オランダ語Ⅲ
- オランダ現代社会論
- オランダ文化論
- 日蘭比較文化
- 日蘭交流史

Column

オランダ語モジュール

このモジュールは、「オランダ語Ⅰ～Ⅲ」の三科目六単位から構成されており、オランダ特別コースの学生は必修です。初級レベルの講義である「オランダ語Ⅰ」では、基本の文法を会話に取り入れることで、自然にオランダ語の文法を身に付けることを目指します。中級レベルの「オランダ語Ⅱ」では、初級で身に付けた聴く・話す・書く力に加え、長文の読解や作文にも取り組みます。「オランダ語Ⅲ」では、さらに講義のレベルを上げ、ライデン大学への留学準備をします。これらの講義では、言語の習得に終始することなく、広くオランダの文化等を紹介する予定です。

一年半の語学学習でオランダの大学の講義に付いていけるか不安に思う人もいるかもしれませんが、留学中もオランダ語の語学授業があり、またライデン大学で受講する専門科目講義の多くは英語で開講されます。ただ、留学生活はキャンパスの中だけで送るものではありません。このモジュールを受講することにより、オランダ語で日常会話ができ、辞書を使ってオランダ語の新聞を読めるようになっておけば、オランダでの留学生活は、より一層充実したものとなるでしょう。

Message

ラーディンク・ファン・フォレンホーヴェン オランダ大使

日本におけるオランダ学の重要な拠点として

オランダ政府が海外でのプロモーションに使用するスローガンの一つは、「国際ビジネスの先駆者オランダ」です。やや大げさに思われるかもしれませんが、オランダと長崎の豊かな歴史を見れば、実際それが大いに真実であることがわかります。400年前、オランダ人は既に国際化の必要性に気づき、遠隔地との取引に世界中へ出向いていきました。そして、たどり着いた場所の一つが日本でした。

1600年の「リーフデ（慈愛）」号の漂着は、日本とオランダのたぐいまれな関係の始まりとなりました。日本が鎖国状態の間も、オランダ人は西洋人として唯一日本での滞在を許可され、交流は続きました。出島でのオランダ人の存在が独特であったことから、オランダ人と日本人の関係は取引にとどまりませんでした。この小さな島を通して、たくさんの西洋の知識や学問が日本に入り、その結果、オランダ人は、オランダ語とともに、日本の近代化の基礎を築く上で重要な役割を果たしました。200年以上もの間、日本における西洋の知識が全てオランダ語を通して吸収されたことは驚くべきことです。

このようなオランダと日本の長く、豊かな歴史からすると、これまでオランダとオランダ語に関する本格的な講座が日本になかったことは全く意外です。したがって私は、長崎大学の多文化社会学部の開設と、その中のオランダ特別コースの開講を大いに歓迎します。オランダと長崎大学の深い関係を考慮すると、このコースを開設するのに、これ以上の最適な場所はないと考えています。そして、それが日本におけるオランダ学の最も重要な拠点に発展していくことを願っています。

Nagasaki University School of Global Humanities and Social Sciences

多文化社会学部の英語教育と留学

最新システムで二十四時間学習可 多彩な留学メニューもあり モチベーションもアップ

Interview

西原俊明

長崎大学言語教育研究センター 教授。一九六三年長崎県生まれ。博士（言語学）。専門は言語学。主な著書は『英語と文法と』（開拓社）、『Better Health for Everyday Life』（金星堂）、『Cultural Encounters』（センゲージラーニング）などがある。

七月に行われた多文化社会学部の初めてのオープンキャンパス。その模擬講義で面白い場面がありました。ネイティブの英語がほとんど聞き取れない高校生に、西原俊明先生がちょっとしたレクチャーをし、二度目のリスニング。すると今度はちゃんと聞き取れるようになり「わぁ！」と歓声が上がったのです。

一連の出来事は〝西原マジック〟として高校生の間で話題になりました。その西原先生に、多文化社会学部の英語教育と留学についてお聞きしました。

「日本の中学、高校の英語教育を経てきた学生は、リスニングが弱点である場合が多いのです。しかし英語の音の特徴を意識し、その特徴に合わせて発音できるようになると、聞き取れるようになります。また、リスニングの練習では英語を日本語に置き換えるクセもあるのですが、私たちが独自に開発した速読システムは、画面をフレーズごとに読んでいきスピードを上げていくので、自然と英語を日本語に訳さないようになります。近い将来、スマートフォンなどでもアクセスできるようにして、いつでも速読の練習ができる環境を整えていきたいと考えています。また、私は『やり直しの英語』と呼んでいますが、多文化社会学部の授業では、一つの英単語に一つの日本語をあてはめるのではなく、コアをつかむような覚え方を教えたいと思っています。そうすることで、手持ちの単語でも十分自分の言いたいことが表現できるようになります。英語が怖くなくなりますよ」。

弱点を意識しながら行う新しい学習方法なんですね。ところで長崎大学には最新の授業支援ツールがあると聞きました。

「はい、オンラインＣＡＬＬシステムというもので、教員が電子化した教材を学生がＵＳＢで持ち帰って自習できたり、授業外でもオンラインでＰＣ画面に呼び出して学べるのが最大の特徴です。また学習履歴を教員がチェックできるので、結果だけでなくプロセスも評価の対象にできます。バラ色のキャンパスライフを望む学生には少々きついでしょうが、最短で語学力を磨くことができます」。

留学についてはどうでしょう。

「留学は、ＴＯＥＦＬ点を基準にした語学力に応じて様々なメニューが用意されています。海外ボランティア、短期・中期の語学留学、海外フィールドワークや自主企画型のインターンシップなどもこの学部独特のものです。ＴＯＥＦＬ対策も念入りに情報収集し模試も行うので、初めてチャレンジする学生でも実力が発揮できるようになります。ＴＯＥＦＬのスピーキングの問題では多少間違っていても自信を持ってまとまりのある文をしゃべる方が点数が高いのです。まずは、英語カフェなどでストレスなく気軽にディスカッションする雰囲気づくりから始めますよ」。

これまでの英語の学習を無駄にせず、表現の幅を広げていく英語教育なんですね。

Column

中国語モジュール

このモジュールは「中国語総合表現Ⅰ、Ⅱ」「中国語文献討論Ⅰ、Ⅱ」「中国語プレゼンテーション」の五科目五単位から構成されており、教養教育の初習外国語（中国語）と合わせると、一年次から四年次まで、中国語を続けて履修することができます。

「中国語総合表現Ⅰ、Ⅱ」では、中国語コミュニケーション能力の向上と、より高度な表現力の養成を目指しています。講義では、多くの口頭練習を行うことにより、現在の中国で実際に使われている口語の生き生きとした表現を学びます。「中国語文献討論Ⅰ、Ⅱ」では、現在の中国の種々の問題を取り上げ、中国語の文献を中国語で読み、日本語に翻訳し、中国語で討論します。「中国語プレゼンテーション」では、中国語を用いて、課題を探求し、問題を解決し、それを表現する能力を養成します。

アジア地域に関心を持つ学生は、このモジュールを選択することで、アジア社会の理解に必須の中国語コミュニケーション力を養い、アジア地域の大学へ留学をすることも可能になります。また、中国語による情報収集力と表現力を身に付けることにより、卒業後はアジア地域で広く活躍することもできるでしょう。

Message

真の発見の旅とは、
新しい景色を探すことではない、
新しい目で見ることなのだ

――フランスの作家、マルセル・プルースト――

カトローニ・ピノ
Pino Cutrone
言語教育研究センター助教

私はこの言葉を、学ぶとは何かということを端的に示している点で気に入っています。教育者の役割は、新しい知識を学生たちに授けることだけでなく、彼らの周りの世界を新しい洞察的な見方で発見する手助けをすることだと考えているからです。

刻々と変化し続ける現代世界において社会に貢献する次世代の人材育成に積極的に取り組むことこそが、教育者にとって極めて重要なことなのです。世界がますますグローバル化し、技術革新が進んだ結果、近年では、求職者に必要なスキルは変化しつづけています。こうした状況に対応した人材育成を視野に入れて、長崎大学は、新学部――多文化社会学部を設置することを決定しました。

グローバル化は、私たちの生活の経済的、政治的、社会的、文化的などの多くの側面にはっきりとした影響を与えています。その要求に応えるために、我々の新学部は、人文社会科学の学際的な教育プログラムのための学術的な土台を提供することを目指しています。多文化社会学部では、私は、英語モジュールの科目群と専門モジュールの異文化間コミュニケーションを担当します。

私は、この多文化社会学部のメンバーとして、学生のみなさんの英語力を向上させる機会をもてることを嬉しく思っています。世界中で英語の普及とグローバル化が、同時かつ相互依存的に広がっている現在、英語能力と異文化間コミュニケーション能力は、皆さんの現代社会での成功を支援する強力なツールです。英語は、国際政治、学術、ビジネス、科学などの分野で使用される現代の国際共通語であり、日本人にとって、英語の活用能力を高めることが、今ほど重要になっているときはありません。私は、入学される皆さんがこのような課題に挑戦されることを確信していますし、また、皆さんの発見の旅の手助けができることを楽しみにしています。

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

多文化社会学部公式ウェブサイト
http://www.hss.nagasaki-u.ac.jp

長崎大学　多文化社会学部　検索

長崎大学広報誌［チョーホー］特別号
［編集・発行］Choho特別号企画編集会議
TEL.095-819-2007／FAX.095-819-2156
［長崎大学ホームページ］http://www.nagasaki-u.ac.jp/
2013年11月1日発行

Nagasaki University
School of
Global Humanities
and
Social Sciences

キャリア教育と就職支援

大学で皆さんが何をどう学ぶか、それはキャリアの選択と就職活動にも密接な関係があり、全ての教育は最終的には学生のキャリア形成を目的としています。これから皆さんはグローバル時代のキャリアを意識して大学生活を送りますが、皆さんが大学を卒業する頃には、今の職場環境や就職活動の在り方にももっと大きな変化が生じているでしょう。

グローバル社会の進展は、皆さんが活躍するフィールドの拡大、多様なキャリア観と、よりレベルの高い就職競争をもたらすでしょう。それに耐えうる人材の育成こそ本学部の使命であり、そのためのキャリア教育と就職支援は本学部の最も重要な教育目標の一つです。本学のカリキュラムはまさにそうした狙いをもって構成されています。皆さんが早期段階から具体的なキャリアプランを立て、実行し、成功に導くために、幾つかの大事な要素があります。英語によるコミュニケーション能力、行動力、観察力、論理展開力、自己表現力といった能力要素に加えて、思いやり、協調性、親和性、ストレス耐性といった情緒面の発達も必要です。しかしこれらは大学の授業を聞いているだけでは身に付きません。様々な活動に参加する中で、現場で生じる問題や課題を発見し、それに他者を巻き込んで解決・改善する中で伸びていくものです。ボランティア、インターンシップ、フィールドワーク、留学先での様々な人々との協働といった体験は、そうした機会をもたらしてくれるでしょう。

本学部が提供する専門的知識を身に付け、進級や留学に必要とされる英語力や学業成績等の高いハードルを乗り越えることはグローバル社会へのパスポートです。どのようにそれを就職活動に結び付けるかは、豊富な指導体験と実績を持った教員が一人ひとり指導しますので、皆さんはまず大学の学びと社会体験に集中してパスポートを手に入れてください。

源島福己
国際教育リエゾン機構
国際教育戦略推進部門 教授